

「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会（同志社大学） 2005.10.15
ロンドン同時テロと欧米テロ対策の展開—国際安全保障の視点から
防衛大学校 宮坂直史

1) 2001. 9.11 テロ～2005. 7.7 までの間

イギリス本土（除・北アイルランド）でのテロによる死傷者数はゼロ（7件）
ただしこの間、Richard Reid（靴爆弾）、リシン所持グループの逮捕、
マンチェスターでイラクでの自爆テロリスト仲間逮捕など国際テロ絡みアリ。

⇨他方、IRAの武装闘争は行き詰まり（後に武装解除）

*マドリード3.11、オランダ Theo van Gogh 殺害

2) 7・7テロ事件

4人の実行犯（パキスタン系+ジャマイカ系）全員爆死

アルカイダ本体との関係？ ザワヒリ、8月5日、9月1日のビデオ映像

3) 7・21テロ事件

4人の実行犯（東アフリカ系）全員逮捕

4) イギリスのテロ法の推移について

○1990年代までのテロ法 北アイルランドにおけるテロが対象

○1990年代半ばから国際テロ、より一般的なテロ対策の必要性が唱えられる。

○「2000年テロリズム法」（2000年7月20日成立、2001年2月19日施行）

包括的なテロリズムの定義

禁止団体の指定、捜査権限強化など

○「2001年反テロリズム、犯罪および安全保障法」（2001年12月14日成立）

とくに移民・難民の保護制度を悪用するテロリストへの対応

訴追困難で本国送還できない外国籍テロリスト容疑者を裁判なしに無期限拘束

↓（2005年3月14日に失効するので、急いで新法）

○「2005年テロリズム防止法」（2005年3月11日成立）

国籍問わずテロ容疑者には、移動、通信、他者との接触を禁じる実質的な自宅軟禁

○2005年8月24日 クラーク内相 外国籍人物の送還、入国禁止の基準

特定思想を広げる目的でテロを扇動、正当化、称賛する行為、他人をテロ行為に
誘発すること、コミュニティ間の暴力につながるような憎悪を助長する行為など。

5) EU、フランス、ドイツ、ロシア、中国のロンドン・テロ事件への反応

シェンゲン協定改正（EU）、ヴィジピラート作戦（仏）・・・

6) アメリカのテロ戦略

2005年10月6日大統領演説

7) ローカルだがグローバルに鼓舞されたテロと国際安全保障

○イラク、パレスチナ、チェチェン、カシミール紛争とテロ盛衰の連関

○人口動態（欧州におけるムスリム）の及ぼす影響

○対テロ総論・各論一致、各国で実行バラバラ、対立顕在

2005年10月15日

同志社大学神学部 中田 考

Hizb ut-Tahrir Britain (<http://www.hizb.org.uk/>) Condemns Tony Blair's Announcement to Ban the Party

London, UK, August 5 - Today's announcement at the PM's press conference to impose a ban on Hizb ut Tahrir, the well established non violent Islamic political party has clearly exposed this PM's and government's fanaticism and extremism to curtail legitimate Islamic political debate in Britain, for their own political ends. This is a clear proof of the government's failure to face the political opinions of the party through rational debate and discussion and a desperate attempt to prevent the British public hearing the opinions of the Muslim community.

Hizb ut-Tahrir has a record of over 50 years of following a method of non-violent political activity against imperialism and dictators and despots who rule the Muslim world with the West's approval. In its work to establish the Islamic Caliphate, Hizb ut-Tahrir has never resorted to any sort of armed struggle and nor has it ever incited people to kill innocent civilians. It has throughout its history worked through intellectual and political means while its members have been tortured and killed in the thousands.

'Only the Islamic State Can Guarantee 'Free' Speech'

2005-09-18, Yamin Zakaria, London UK

Islamic State and 'Free' Speech

Each society implements its own version of 'free' speech, but the version implemented in a genuine Islamic state remains constant and fixed. The same can be said for its version of human rights and minority rights. Even if the ruler or the majority in the Islamic State, decides to let's say gas its non-Muslim minorities or quarantine them into concentration camps, they are not allowed to do so by fixed Islamic laws.

In contrast, notions like human rights, 'free' speeches, are fluid in the west; can alter any time at the whim of its rulers or the ruling elite, or the majority population. The events from Camp-X-Ray, Baghram, Abu-Ghreib, Bombing of Al-Jazeera, embedded journalists, to the recent legislations and behaviour of the western governments, clearly illustrate this. For them, the gap between democracy and dictatorship, free speech and censorship, human rights and arbitrary imprisonment and torture, is only a matter of degree and timing.

This is why only the Islamic State can guarantee 'free' speech, as the laws are permanent and fixed. For sure the rabid anti-Islamic elements will frown at the title of this essay, but the truth is a bitter pill to swallow. If swallowed like all the bitter tasting medicine, it can provide an excellent cure, but some will not swallow the pill due to their arrogance and pride! The Holy Quran aptly describes those fanatics: "deaf, dumb and blind and they will not return (to the path of truth)" Holy Quran 2:18. Yamin Zakaria (www.iiop.org)

(international Institute for Peace) (<http://www.iiop.org/index3.php?recordID=88>)

1. 西欧の政治学の概念の不毛性

党派的・イデオロギッシュ・情緒的で使い物にならない

批判の価値もない → 批判もしない（無視） イスラーム学者の絶対多数

「批判」しているのは極少数の欧化知識人のみ

批判に整合性がないのは、批判される対象自体に整合性がないから

学者/研究者の使命はリアルな世界を身も蓋もなく論理整合的に語ること

対極の例：山内昌之「テロと戦争」2005年9月5日付『朝日新聞夕刊』

無差別テロという忌まわしい二十一世紀の政治表現スタイルは、失業や貧困の解消さらに知識社会の構築によって消え去るものなのだろうか。

そうとも言えない点に問題の深刻さがある。何よりもそれらはイラクやパレスチナという中東の「前線」だけでなく、紛争の「後方」にある欧米にも出現しているのが特徴である。・・・いまの状況ならサルトルやサイードが仮に現地のテロに賛成するか曖昧な態度をとったとしても、パリやニューヨークの無差別テロの犠牲者となる皮肉な可能性から免れないだろう。・・・

欧米でテロをする者について、植民地支配のトラウマや欧米社会の「差別と偏見」に基本要因を求める知識人も多い。欧米で成功したアジア系の学者にはテロの加害者責任を無視しがちなものもいるが、・・・具体的目標のないテロのためのテロは国際世論を斟酌しようとしな。日本人にとっても「天を射る」（『史記』）おぞましいテロとの対峙をこれからもしばらくは覚悟しなくてはならない。

(1) 平和主義： イスラームは暴力の宗教/平和の宗教」といったチープな二分法の虚妄。平和主義の不可能性。暴力を暴力的に殲滅するか、暴力を放置するかのも二者択一が存在するだけ。

(2) 自由： 各社会はそれぞれ義務と禁止の体系を有し、規定できずに残った領域が自由と呼ばれるだけ。Cf., 著作権、医療広告。

自由の幻想：物理学に「自由」の存在の余地なし。生理学にも。

・・・「手を動かそう」という意志と脳の活動（運動準備電位）の時間関係だ。もし、脳とは別の独立した何か（魂・霊？）が脳の活動を引き起こし、その結果として随意運動が現れるとしたら、「手を動かそう」という意志は、脳活動に先立つはずだ。

この時間関係を注意深く調べた実験が一九八〇年代に行われたことがある。方法などやや複雑で専門的なのでここでは省くが、実験結果の要点は簡単だ。脳の活動（運動準備電位）が始まってから数十〜100ミリ秒ほど後になって、「手を動かそう」という医師が現れるという結果だった。

「後に」であって「前に」ではない。・・・] 澤口俊之『わがままな脳』筑摩書房2000年、80頁

[要するに自由意志は脳の活動を後追いつけるわけだ。自由意志を作るのは、脳の活動であって、その逆ではない。「自由」とは意志の中ではなく、意志として自覚される前の脳活動の中にあるわけだ。「自由意志」というのは、この意味で「幻想」だといってよい。] 同81頁。

“FREEDOM AND DEMOCRACY” America's Ultimate Polytheism” By Robert Crane

(*Islamica Magazine*, Issue 14 Fall-Winter 2005)

Perhaps the neo-conservative hype about “freedom and democracy” as an end in itself must be elevated to

the modern pantheon of false gods....

The modern polytheistic strategists, who worship power as an ultimate end, are convinced that order comes before freedom, despite the opposite spin in their public relations strategy, and that the status quo therefore must be maintained with all of its injustices. They simply do not believe the wisdom of America's founders who taught that justice is the best cure for chaos and that "freedom" without justice is a fraud. The Neo-Cons cannot even understand why the Founders in the Preamble to the American Constitution listed justice as the first of five purposes for the new polity and listed freedom last.

(3) 民主主義：「共存を強制された集合体において、構成単位の全体に係わる問題が、構成単位の多数の意思によって決定される意思決定システム」

民主主義と自由の相関は「意志決定過程」という限定された場における構成単位の「自由な意志表明」の保証のみ。「多数決における投票の秘密性の確保」政党性の不可能。

現存するいわゆる西欧の政体は、民主主義ではなく制限選挙寡頭制

(4) テロ： イスラームに「テロ」概念不在。殺人罪、強盗罪、内乱規定で十分。「テロリストとは交渉せず」と違い「内乱」には、先ず叛徒の言い分を聞き、権力者に不正があれば糾す。理想の4正統カリフのうち3人までが「テロ」により暗殺。

・・・犯罪がこのような集合生活全体の諸条件と緊密に結びついてあらわれる以上、およそこれほど明白なかたちで正常性のあらゆる徴候を呈している現象もないことになる。・・・(デュルケム『社会学的方法の基準』岩波書店 1982年 151頁)

・・・犯罪を正常社会学の取り扱う現象のうちに分類すること、それは、もっぱら犯罪は人間のいかんともしがたい悪意に由来する遺憾ではあるが不可避的な一現象であることを意味するのではない。むしろ、それは、犯罪が公共な健康の一要因であり、およそ健康な社会にとって不可欠な一部分をなしていることを確認するものである。(同上 152頁)

したがって、犯罪は、必然的かつ必要なものである。すなわち、犯罪はいつさいの社会生活の根本的諸条件に結びついており、しかもまさしくそのために有用なのである。

・・・犯罪がそれ自体で道徳意識の進化に有用な役割を演じることもあるのだ (同 158頁)

じっさい、犯罪がもっぱらきたるべき道徳の予兆をなし、やがておとずれるものへの一道程をなしたことが、なんと数多くあったことか。(同 159頁)

・・・通念に反して、犯罪者は、もはや根本的に非社会的な存在、社会のなかによび入れられた一種の寄生的な要素、すなわち同化できない異物などではなく、まさしく社会生活の正常な主体としてあらわれる。犯罪もまた、もはや、いかに狭い限界内に抑制されてもおお足りないような悪と考えられてはならない。犯罪の率が平常の水準からあまりにもいちじるしく落ち込むような場合、それは喜ぶべきことであるどころか、この外見上の進歩はなんらかの社会的混乱と同時的に、また緊密に結びつきながら生じているものと考えて間違えない。(同 160頁)

テロ：「暴力の行使の威嚇によって正しい（行為者の準拠する価値・規範体系に照らして）目的の達成を目指す行為」（目的は手段を正当化する：戦いでは負けないことが最優先）何がテロでないか。「8月の大阪での自殺サイト連続殺人事件」（暴力自体が目的）「愉快犯」

(事件の引き起こす恐怖自体が目的)「暴力団の恐喝」(目的が正しくない)独裁者暗殺(桜田門外変井伊直弼暗殺)(それ自体で政治的目的達成)

(テロ組織:軍、警察 テロ防止:武装解除、テロによらない目的達成を可能にする)

・・・ビンラディンは、声明文でしばしば歴史的な出来事を取りあげる。もっとも劇的だったのは2001年10月7日のビデオだろう。ビンラディンは、イスラーム教徒たちが「80年以上にわたって」苦しめられてきた「屈辱と恥辱」について語ったのである。それではこの「80年以上」とは何を意味するのだろうか。欧米の消息筋の人々は考えあぐねて、80年前のさまざまな事件をもちだしたのだった。ところがビンラディンが語りかけたイスラーム教徒たちには、それが何を意味したかすぐにわかったはずだし、その意味をしっかりとうけとめたに違いない。

・・・偉大なイスラーム帝国の最後を飾るオスマン朝のスルタンがついに決定的な敗北を喫したのは1918年のことだった。・・・ (バーナード・ルイス『聖戦と聖ならざるテロリズム』紀伊国屋書店2004年12月16頁)

廃止されるまでの13世もの長い間、カリフ制にはさまざまな変遷があった。しかしイスラーム教徒の統一の有力なシンボルであるだけでなく、イスラームのアイデンティティのシンボルであった。・・・ウサマ・ビンラディンが語った「屈辱と恥辱」とは、この内外からの攻撃によるオスマン帝国のスルタン制とカリフ制のことに違いあるまい。(同上18頁)

「米国が今、味わっているのは、われわれが何十年にもわたって味わってきたものと比べれば、取るに足らないものだ。われら共同体はこの屈辱と侮辱を約80年、味わってきたのである。」

ここで言及されている80年とは、すでに拙著のなかで指摘したように、1922年9月11日からの約80年を指すと推定される。1[31]1922年9月11日とはすなわち英国によるパレスチナ委任統治発効の日である。犯行日が9月11日であったことは、犯人たちが米国中枢への攻撃とパレスチナ問題を結びつけて考えていたこと意味している。(「オサーマ・ビン・ラーデンで読むオサーマ・ビン・ラーデン」保坂修司 <http://homepage2.nifty.com/public-philosophy/hosaka2.htm>)

* 「テロ」についてはジハードとの関連で論じられることが多いが、イスラーム法では殺人の同害報復刑は私法(=遺族以外に赦す権利はない)、為政者は刑の執行の義務だけで免責権なし。

* 「テロリスト」のメッセージの「公共性」

9月24日MAB(Muslim Association Britain)「反テロ」法・イラク戦争反対デモ組織10万人動員(ムスリム以外の英国国民も参加)

4人の英国教会の主教:アメリカ追隨のイラク派兵を在英ムスリムに謝罪すべし(9/19)

* 言説の「公共性」=「自由」の所産 cf., オウム真理教など「カルト」の洗脳

* 米英の「テロ」

イラクで10万人以上の民間人を殺害(軍司令官を兼ねる大統領、首相は共同正犯)

米キリスト教福音派の右派で有力指導者のパット・ロバートソン師(保守派キリスト教団体クリスチャン・コアリションの創始者)は、2005年8月22日放映の自らの宗教番組の中で、反米姿勢を鮮明にしているベネズエラのチャベス大統領を暗殺すべきだと訴えた。

9月19日、イギリス軍戦車がバスの刑務所を破壊しイラク人2名を殺害して収監されていたイギリス軍工作員を脱走させる。

2. イギリスのイスラーム

*2001年春のCensusに基づくイングランド・ウェールズのムスリム人口

白人：ムスリム人口	179,409人	総人口47,520,866人
混血：	64,958人	661,034人
南アジア：	1,048,612人	2,032,463人
インド	131,463人	1,036,807人
パキスタン	657,316人	714,826人
バングラディシュ	259,833人	280,830人
その他アジア	89,704人	241,274人
黒人	106,717人	1,139,577人
その他	55,679人	446,702人
合計	1,546,626人	52,01,916人

(Tahir Abbas(ed)., *Muslim Britain - Community under Pressure*, London & New York, 2005, p. 21)

*スモールワールドとしてのイスラームネットワーク

社会構造の基本パターンを「組織」と「ネットワーク」に分けるなら、イスラーム社会はすぐれてネットワーク的な社会（法人概念[国家、会社]の不在）

9月11日のテロ攻撃以降、われわれは、西側世界が戦っているのは「テロリスト集団のネットワーク」であり、このネットワークには階層性に基づく命令構造はなく、世界中に分布しているごくふつうに考えるようになった。インターネットの人間版とでも言えそうなテロのネットワークは有機的な構造をもち、そのためにきわめて攻撃を受けにくくなっている。(マーク・ブキャナン『複雑な世界、単純な法則 - ネットワーク科学の最前線』草思社2005年3月25頁)(ダンカン・ワッツ/ステイブ・ストロガッツ『スモールワールドネットワーク』における集団力学『ネーチャー』1998年(同28-29頁))

・・・60億の人々がわずか6本のリンクでつながってしまう・・・(同15頁)

・・・「六次の隔たり」(six degrees of separation)・・・数年前のこと、ドイツのある新聞社がこれのおもしろい試みを取り上げ、フランクフルトに住むシシカバブ店のオーナーと彼の大好きな俳優マロン・ブランドとを結びつけてみようとした。数ヵ月後、『ディ・ツァイト』紙のスタッフは、二人を結びつけるのに必要な個人的なつきあいのリンク数は6本でいいことを発見した。イラクからの移民で、サラ・ベン・ガールンという名のシシカバブ店のオーナーには、カリフォルニア在住の友人がいた。たまたま、その友人はある女性のボーイフレンドといっしょに働いていた。そしてその女性は、ブランドが主演した『ドンファン』のプロデューサーの娘と大学の女子学生クラブで先輩後輩の仲だったのだ。とまどいを覚えるかもしれないが、六次の隔たりはまぎれもなく社会的世界(social world)の特徴のひとつであり、・・・(同13-14頁)

・・・強い絆よりも弱い絆のほうが重要性をもつ場合が多いのは、弱い絆は社会のネットワークを縫い合わせるうえで不可欠な紐帯の役割を果たしているからだというのである。弱い絆は社会の「近道（ショートカット）」で、これらが失われてしまうとネットワークはバラバラに崩れ落ちてしまうだろう。（同 62 頁） 「分散型」ネットワーク（同 116 頁）

・・・スモールワールド・ネットワークには二つの種類があるようだ。すべ手の要素がほぼ同数のリンクをもっている平等主義的ネットワークと、リンク数に大きな差があることを特徴とする貴族主義的ネットワークである。・・・これらの貴族主義的なネットワークのいずれも、おそらく金持ちほどますます豊かになっていった結果であると思われるハブ、すなわちコネクターが存在している。（同 188-189 頁）

「平等主義の類に属するワッツとストロガッツ版のスモールワールド・ネットワーク」（同 197 頁）

・・・ランダム・ネットワークは冗長性があっても、統一性を欠いた攻撃にさらされるとまたたく間にばらばらになってしまうのである。・・・貴族主義的ネットワークは、攻撃を受けたときに優雅な壊れ方をし、決して壊滅的な被害をこうむることはなかった。（同 209 頁）

・・・世界の全人口、60 億の人からなる円周に戻ることにしよう。ここでは誰もが、直近の 50 人の隣人とつながっている。この規則的なネットワークの隔たり次数はざっと 6000 万だ。これは、一回に 50 人の隣人とつながっている。これは、一回に 50 人分移動したときに、60 億人からなる円周を半周するのに要する回数に等しい。しかしながら、数本のランダムリンクを入れると、この数字は急激に小さくなる。ワッツとストロガッツの計算によれば、新たに入れたランダム・リンクの割合が一万本につき二本でも、隔たり次数は 6000 万から約八に下がる。もし 1 万本につき三本の割合なら、5 まで下がる。一方、ランダム・リンクがこれくらい少なければ、社会のネットワークならではの構造を作り出しているクラスター化には影響は生じない。

このようなスモールワールド・ネットワークは不思議な力を発揮する。普遍的な性質という観点から見れば、わずか六次の隔たりであらゆる人を結びつける一報で、現実世界に見られる社会構造 — つまり集団やコミュニティが豊かにクラスターを作って絡み合っている社会構造 — を可能にするには社会的世界をどのようにつなげばいいのかが、スモールワールド・ネットワークから明らかになる。社会的世界の長距離の架け橋である弱い絆は、たとえごく小さな割合でしか存在しなくても隔たり指数に大きな影響を及ぼすのだ。（同 82-83 頁）

・・・スモールワールド・ネットワークの特徴は、隔たり次数が小さいことだけでなく、高度にクラスター化した状態を保っていることでもある。このネットワークの布地はきわめて密に織られていて、そのためどんな要素も、つながり合った局所的な網構造に無理なくしっかりと取り込まれている、と言ってもよいかもしれない。クラスター内の各要素は、友人の集団内と同じように緊密につながっていると見ることもできる。クラスターどうしをつないでいる少数の「弱い」絆は、ネットワーク全体を狭い状態に保つ働きをしている。（同 322-323 頁）

* 「穏健派」の言説の不毛性

The Muslim Council of Britain utterly condemns today's indiscriminate acts of terror in London. These evil deeds make victims of us all. It is our humanity that must bring us shoulder to shoulder to condemn, to

oppose and to overcome those who would spread fear, hatred and death.

CAIRO, July 7, 2005 (IslamOnline.net & News Agencies) – The deadly attacks that rocked London earlier Thursday, July 7, drew condemnation from scholars, officials and even individuals from across the Muslim world.

“We were dumbfounded by the grave news of the London bombings which killed tens and wounded hundreds of innocent people who committed no crime,” prominent scholar Yusuf Al-Qaradawi told IslamOnline.net.

“Even at the time of war when state armies battle face to face, it is not permissible to kill women, children, elders, priests, farmers and merchants; people we nowadays call civilians.”

*** 罪の無い非戦闘員を正当な理由無く殺してはいけないのは当たり前(事実「テロリスト」たちも殺人の前科なし)**

問題は「罪が無いのか」(民主主義=全体主義国家では連帯責任)、「正当な理由が無い」のか(占領軍撤退)

「問題は我々が言うことにある、世界は我々を見ている—ロンドンのアラブ紙西側モニター機関の活動を指摘」ロンドンで発行されているアラビア語紙 Al-Sharq Al-Awsat ※1は、2005年9月1日付紙面で「世界は我々を観察している」と題する記事を掲載した。BBC放送の人気番組パノラマが、ロンドンの過激ムスリムを特集に組み、それがムスリム社会に大きな波紋をおこしたが、コラムニストのムカレド (Diana Mukkaled) がこの問題を取りあげたもの。ちなみにこの特集番組のプロデューサーはMEMRIから情報提供をうけている。記事の内容は次の通り。

英ムスリム評議会 (The Muslim Council of Britain) のメンバー達は、先週放送された BBC の人気番組パノラマの特集番組を見て、怒り狂った。番組の主旨は、同評議会がイギリスに400もあるモスク及びムスリム団体の監督に失敗し、過激派を抑えることができなかった、という内容である。番組パノラマは、在英イスラミック指導者達にもインタビューしたが、彼等は異口同音に、イスラエルの民間人に対する自爆攻撃を支持するが、ロンドンの攻撃には反対、と主張した。番組では、キリスト教徒、ユダヤ人及びヒンズー教徒に対するイスラムの考え方、ムスリムのなかには他の宗教の信徒を無神論者 (infidels) とみなす現実についても、討論があった。・・・

このパノラマ番組で特に興味をひくのが、ジャーナリストのジョン・ウェアと英ムスリム指導者達との論争である。・・・そこにあるのは、「我々は信仰を持った者であり、天国の住民である。彼等は不信仰の徒であり、地獄の住民である」というメッセージである。これが、日常口にされる言葉であり、(アラブの) 放送で使用される言語で、如何なる放送も、この言語にからめとられている。しかるに、このような(自爆) 行為を宣揚する者の心中には、アラビア語でアラブの放送で繰返し主張しても、世界は心にとめてくれないという不満がある。

ところが、この当の本人達が、外国のテレビに出演して英語で喋ると、アラビア語で言っていた内容とまるで違うことを言うのである。

そのため、アラビア語で論じていた時はこう言っていたのではないかと突かれると、彼等はすっかり混乱してしまい、あわてて論旨をすりかえ、或は話題を変えようと必死になる。パノラマの特別番組で、これがすっかり露呈してしまった。

アラビア語で喋っている分には本音は外に洩れないと思っているだろうが、そうは問屋がおろさない。世界はすっかり見張っているのである。欧米の組織で、あらゆる形態のアラブメディアをモニターして、それを翻訳している

専門機関がある。番組の大半は録画され、一般に提供されている。従って、ムスリムの聖職者がアラブの放送で、「ユダヤ人は猿と豚のあいの子」(Jews as "grandchildren of monkeys and pigs,") などと言うと、その言葉は世界中何百万という(非アラブ、非イスラムの)人々に届くのである・・・在英ムスリムは、BBCの発表内容はシオニストのでっちあげ、と非難した。しかしそのような主張は、ムスリム指導者自身が述べている言葉と比較されてしまえば、たちまち化けの皮をはがされてしまう。問題はBBCが言ったことにあるのではなく、我々が言っていることにこそあるのだ。(Diana Mukkaled) 中東報道研究機関(The Middle East Media Research Institute 略称 MEMRI) No.998

* クルアーンの中の猿と豚の変身

『また、おまえたちは、おまえたちの中で安息日を破った者を確かに知っていた。そこで、われらは彼らに言った。「卑しい猿になって追い払われよ。」(2:65)』

『安息日を破った者を』われらが彼らに禁じていた漁獵によって、法(のり)を超えた者を。彼らはアイラの住民であった。『確かに知っていた』 『確かに(ラ・カド)』の「ラ」は誓言の「ラーム」『卑しい』(慈悲、あるいは名誉から)遠ざけられた。『猿になって』 それで彼らは猿になって、3日後に死んだ。

『言え。「アッラーの御許での報償においてそれより悪い者についておまえたちに告げようか。アッラーが呪い、怒りを下し、彼らから猿と豚をなし給うた者、また邪神を崇拜した者、それらの者は場所が一層悪く、中庸の道から一層迷った者である。」(5:60)』

『アッラーの御許での報償において』 報酬において。報いの意。『それより悪い者について』 おまえたちが非難するその民より。『告げようか』 知らせようか。『アッラーが呪い』 それは。彼の慈悲から遠ざけ。『彼らから猿と豚をなし給うた者』 変身によって。『また邪神を』 シャイターンを。彼に従うことによって。『崇拜した者』 「マン(者)」(を捕う)。『彼らから』においては意味が維持され(複数形だが)、関係代名詞『マン(・・・者)』とその中のものは文字通りを取って(単数形にして)いる。『彼ら』とはユダヤ教徒である。『崇拜した(者)('abada)』は、別の読誦法によれば、第二語根の「パーウ(b)」をダンマで「'abuda」と読み、その後のもの(「邪神」)をその属格とする(「'abuda al=Tāghūti」)。「'abuda」は「奴隸('abd)」の集合名詞形で、『猿』に接続し、対格である(つまり、「彼らから猿と豚と邪神の奴隸をなし・・・」)。『それらの者は場所的に一層悪く』 なぜなら、彼らの住処は獄火だからである。(『場所的に』は) 弁別の対格。『中庸の道から一層迷った者である』 真実の道から。『中庸』の原義は、中間(長くも短くもないその間)である。『一層悪く』、『一層迷った』(という比較級)の言及は、「おまえたちの宗教ほど悪い宗教を知らない。」と言った彼ら(不信仰者)の言葉(第59節注釈参照)に対応したものである(信仰者には悪いところはまったくない)。

『彼らが禁じられたことに対して高慢な態度を取った時、われらは彼らに言った。「貶められた猿となれ。」(7:166)』

『彼らが禁じられたことに対して』 (禁じられたことを) 怠ったことに対して。『高慢な態度を取った時』 思いつ上がった時。『貶められた』 不面目を被った。『猿となれ』 そして、彼らはそうなった。これがこの前に述べられたこと(『・・・不正をなした者たちを彼らが逸脱したがゆえに悲惨な懲罰で捕えた』)の詳細である。イブン・アッバースは言った。「黙った者の一団がどうなったか私は知らない。」イクリマは言った。「この一団は滅ぼされはしなかった。なぜなら、彼らのなしたことをこの一団は嫌い、『どうしておまえたちは・・・訓戒するのか。』』と言ったからである。」アル=ハーキムの伝えるイブン・アッバースによれば、彼はこれ(このイクリマの見解)に

戻り、それが彼の気に入った。

3. (イスラーム)解放党

世界で唯一の国際イスラーム政治組織 これ以外の俗に「イスラーム原理主義」と呼ばれている運動、組織は全て、単に不完全なイスラーム政治運動と言うより反イスラーム運動であり、イスラーム国際ネットワークを構成するエスニック団体

(1) 設立と組織構造

イスラーム国家の樹立とエルサレムの解放という二つの目的をもって結成。

「政党であり、その実践は政治、その原理はイスラームである。そして解放党は、ウンマがイスラームを自らの課題として引き受けるようになることを目指し、カリフ国家再興、アッラーフの啓示に基づく統治の実現に向けてウンマを率いるために、ウンマの中で、そしてウンマと共に行動する。解放党は政治団体であり、精神修養団体でも、学術団体でも、教育団体でも、慈善団体でもない。イスラーム的思考様式がその身体の本質、その中核、その生の核心である。」

1949年: ナブハーニー(1909/10-77)によりエルサレムで結成。53年政党登録申請の拒否後、解放党は非合法化され地下活動を強いられた。

シリア、イラク、レバノン、トルコに地域支部をおくが(公式ホームページ(<http://www.hizb-ut-tahrir.org/>): アラビア語、ドイツ語、英語、ロシア語、トルコ語、ウルドゥー語、デンマーク語、中央指導部は、常任の監督官、あるいは査察使派遣を通じて、地域支部の活動を指導。大都市には5名から8名の構成員からなる地区委員会設置。地区委員会の日常業務は教育、党員リクルート、支部との連絡調整。党員資格は(1)ムスリムであり、(2)15歳以上であり、(3)他の政治組織に所属していないこと、であるが、通常3年の解放党の原則の学習、保秘能力試験後入党許可。党の財政は党員からの寄付及びナブハーニーの著者の売上によって賄われる。党の活動には、モスクでの説教、議会活動(58年迄)。学校での教宣、出版物

の配布、学習サークルの設立、一般集会の開催などがある。学習サークルは、週例会と月例会があり、週例会は1回2時間であり、初心者には『イスラムの制度』、『政党構成』、『解放党の諸概念』の順に党の教科書を読み進み、月例会は1回1時間から2時間であり、全ての党員に出席義務づけ。

民衆に対するイスラーム教育、党の思想の教宣に加え、社会・経済学者、政治家、国家元首など「有力者」への教宣重視。これらの「有力者」にクーデターを勧め、成功すれば解放党指導部の権力を委譲、カリフ国家樹立宣言が、政治的目標。

(2) 政治理論

- | | |
|-------------|---|
| 憲法草案総則 | 第1条「イスラームの信条が、国家の基礎……」 |
| 統治制度 | 第15条「統治システムは単一システムであり、連邦制度ではない」 |
| イスラーム国家構成要件 | 第20条「(1)主権はイスラーム法(shar‘)に帰属し、人民にではない。
(2)権力はウンマに属する。(3)ただ一人の国家元首の任命がムスリムの義務である。
(4)イスラーム法の立法化は国家元首のみの大権、彼が憲法ほか全ての法律を制定。 |

(3) 革命論

今日のイスラーム諸地域は、イスラーム法上、全域が「不信仰の居住圏」あるいは「戦争の居住圏」とみなされる。「不信仰の居住圏」＝「イスラームの居住圏」の対立概念。

「イスラームの居住圏」＝「イスラームの法規に則って統治され、その治安がイスラームの安全保障、つまりムスリムのスルタンの安全保障に基づいている居住圏」

背教を除き為政者の放伐不可。イスラームの居住圏内での為政者の背教には、放伐が可能であれば、武装蜂起、奪権闘争義務。但し、放伐が義務となるのは、放伐が可能であり、かつそれが「イスラームの居住圏」においてである場合のみである。

『不信仰の居住圏』であり、イスラームの諸法規不履行の場合、その地のムスリムを支配する為政者排除は「助勢要請」による。

イスラーム国家建設過程。第 1:「啓蒙」段階。ムスリム個人個人に秘密教宣。文化面に限定、党の原則を理解した個人により党組織ができれば第 2 段階に移行。第 2:「対社会活動」段階。公然教宣①サークル文化活動、②公開文化活動、③イデオロギー闘争、④政治闘争、⑤公共福祉活動など。第 3:「奪権」段階。教宣活動の庇護とカリフ国家樹立・政権奪取のため実力者への「助勢要請」。

(4) 現状: 分裂 ムハージルーン(亡命者) イスラーム革新党(Party for Islamic Renewal)

イスラーム革新党代表 Dr.Muhmmmad Al-Masari 党ラジオ局閉鎖圧力(イラクで反英軍煽動)

「我々は 11 年間にわたって British Public の良き歓待と庇護を享受してきた。我々のホストである British Public に対する感謝を知的に認め、心底から有難く思い、更に口に出して表明することが客人としてのイスラームの義務である。もし我々がホストに対してその家の中に危険な毒蛇がいることを警告しなかったとすれば、我々は我々に対する信頼を裏切り、我々の義務を怠ったことになる。その毒蛇とは、嘘つきの戦争犯罪人、大量虐殺者のトニー・ブレアである。」 list@tajdeedmail.net/2005/8/19(August 18, 2005 Calls to close London's Jihadi radio station By Jenny Booth, Times Online)

Britain's The Guardian newspaper further called the ban "unwise" in an editorial Saturday, August 6.

"Hizb ut-Tahrir has some deeply objectionable views, not least on Palestine and Israel. Yet it appears committed to non-violence in the UK and seems far more interested in politics than direct action," it said.

The Muslim Council of Britain, the main Muslim body in the country, has also said the ban would be "counter productive".

"Banning Hizb ut-Tahrir is certainly not the solution and may well prove to be counterproductive," it said in an online statement Friday.

"We understand that Hizb ut-Tahrir in the United Kingdom is an avowedly non-violent group."

(<http://www.islamonline.net/English/News/2005-08/06/article02.shtml>)

- * 全英ムスリム評議会は解放党の不倶戴天の敵故に「解放党非合法化反対」は特筆に値)
- * イスラーム解放党の政治論を(スンナ派イスラーム)の政治論の「理念型」とし、その他はそこからの偏差として分析するアプローチが最も有効。

参考文献：中田考「イスラーム解放党のカリフ革命論」『イスラム世界』49, pp. 38-58, 1997/07

『ビンラディンの論理』、小学館文庫、2002年1月1日